明治150年企画特集（10）

さらに10年後の「明治160年」に思いを寄せて

～日本近代史80年周期説～

CNCP　常務理事　有岡 正樹

今年が「明治150年」という一つの歴史的な区切りとして注目されることもあって、これまで９回にわたりこの言葉をテーマに本誌に意見が寄せられてきた。そんな中で、少し的を外れた妙な標題の投稿になったが、30年以上にも及ぶ日本近代史についての我が思いに触れておきたい。

1．日本近代史80年周期説

さて、そんな前置きでの本原稿の背景は、本ページの下部の図に由来している。この図を公表される原稿に用いるのは、最初が楽友地盤研究会編集「21世紀、建設業はどう変わるか」（鹿島出版会 1999.3）で、それから20年経っての今回が２度目である。この図を最初にスケッチし、勝手に「日本近代史80年周期説」と名付けたのはもう30年前で、1980年代後半の７年余私が海外で生活していた時のことである。駐在日本人仲間で回し読みしていたある月刊誌に記載の記事に端を発しての私流の一種の言葉の遊びであったが、一言でいえば、‘Japan as No.1’と称されていたバブルがはじけ出していることを、直感したのである。外から日本を見ていたことも関係していたのか知れない。

そんな雑誌はもちろん読み捨てなので今となっては発行年月も号数も不詳だが、多分対談かなんかで日本近代史が80年周期で「禍福」あざなえるというか、世界での日本の国力が上下してきたことが語らており、これからもその周期で歴史を歩むとすると40年後には取り返しのつかない「禍」が懸念されるとの、いわば負の予言であった。明治維新（1865 薩長連合：江戸幕府崩壊）、日露戦争勝利（1905 世界列強の仲間入り）、太平洋戦争敗戦（1945 広島・長崎原爆投下）そしてプラザ合意（1985 円の自由化）を具体的史実として、40年ごと（80年周期で）に付記したいくつかのキーワードと共に国力が上下してきた、というのが対談者の論点であった。

2．2020年からの警鐘

上記のような考え方を当時のシドニー日記の片隅に手書きの周期図としてメモしていたのだが、帰国後も４，５年はそのままにしていた。ある時そのことを思い出して、コンピューターグラフィック技能を持った若手にワープロ図化をしてもらったのが、この図の原型である。その背景としては、1997年１月の日本経済新聞が「2020 年からの警鐘 第１部日本は消える」と題する長期コラム記事の連載を始め、そのタイトルに‘アッ’といわれたことがある。グラフには“警鐘”としての2020年が明記されている。それまでは歴史的結果として実線で表わされているが、1990年以降は点線で記載されており、そのときを境として過去と未来とした次第である。

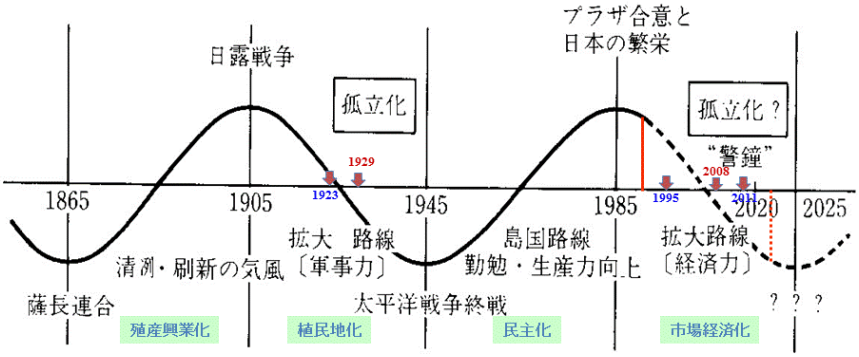

図 1-12　日本の近代史からみた国力周期図

その「2020年からの警鐘」シリーズは大企画で、第１部が上述の通り‘日本が消える’でその後８月末の第８部‘土地の反逆’ま

で継続的に連載され、それぞれの合間や、それ以降も様々な企画記事が掲載されて、ほぼ 1 年にも及んだのを憶えている。また、それらは同 1997 年 6 月と 9 月に単行本として発刊された。2020 年まであと 2 年、その検証企画集が期待される。

3．1990 年代以降の動向

シドニーから帰国後は、再び大阪での地下鉄工事に関わり日本の現場を担当して、とくに建設マネジメント面での彼我の差を再認した。大学での非常勤講師として次世代に講義をしたりする機会が増え、戦後日本の建設産業界の経緯とその評価に当たってこうしたグラフを用いたりしてきた。リーマンショックと世界恐慌、阪神淡路および東日本大震災と関東大震災など、その都度 2 つの 80 年周期に共通する歴史的事象を追記（図中赤字矢印）して話したりもした。

ここでこの周期説そのものに関する個人的な認識について、少し振り返っておきたい。まずシドニーでその雑誌を読んで簡単なグラフをメモしながら再認識したのは、日本の国力変化の振幅が 80 年という長期にわたることであった。シドニーに赴任した当時 10 年来の不況下にあったオーストラリアだったが、V 字回復に思い切った政策を取っており、日本の企業がシドニーハーバートンネル PPP 事業化を民間提案し、財政難下もあってそれをやらせてくれるだけの変革を遂行する裁量に驚かされた。先例主義で、先送りと縦割りが常の日本しか知らない我々にとっては驚き以外のなにものでもなかった。その後の政治情勢などを見ていても、直感的だが 20 年周期ぐらいの国力変化を繰り返しながら、オーストラリアは間違いなく発展してきているのである。

これに対し日本では 1980 年代末のバブル崩壊から、「失われた 10 年」が「20 年」になり、その後も緩慢な衰退を続けて来た。国際的に見て種々の国力指数レベルもしかりである。21 世紀に入って相変わらず右肩下がりを続ける日本の現実を、この図を使って強調したこともあった。

ただ、まだその頃こうした説は一般的ではなく、ブログで検索（今ほどは精緻ではないが）してもほとんど反応なかった。これが 80 年周期だとか、40 年毎といった調子でいろいろの意見が見られ出したのは、「戦後 70 年」や「明治 150 年」といった節目との関係で歴史的変化が関心事となった 2010 年代以降である。2005 年の日経新聞に、類似の周期説を呈された論説副主幹にメールでその説の出所を質したが分からず、“もし何か分かれば互いに連絡を”と云い残したほどであった。40 年ごとの世を変えるような事象が、例えば 1865 年の薩長連合ではなく 1868 年の明治維新であり、また 1985 年のプラザ合意でなく 1988 年バブル崩壊とする説も多い。いずれにしろ、行くところまで行かないと変化が起こせないタテ社会と、村・職域といった小さく閉じたヨコ社会という日本の DNA が、歴史的長周期の背景にありそうである。

4．あと 10 年に思いをはせて

私の同世代はあと 10 年程で、この周期説における 1945 年の「禍」から次の「禍」までの 80 年を過ごし終えることになる。逆にいえば人生の朱夏である 40 歳前後を「福」の時代で過ごしたことは、まさに偶然だが、最も幸せなめぐり合わせであったのかも知れない。一方 20 年くらい前から、このままでは日本はとんでもないことになるのではとの全く個人的な視点で、次の「禍」の極限に向かう振り子が少しでも早く反転することに貢献できればと、大学教育や NPO 活動にも関わって来たが、もちろん隔靴掻痒、そんな簡単なものではないと自認に終わってきた。

さて、そんな視点での北朝鮮問題に関する世界情勢だが、5 月半ばには「6 月 11 日シンガポールでの米朝首脳会談開催の予定」が公表され、事態の振り子は好転に向けて大きく触れ出したとの思いもつかの間、やはりというか 10 日も経たない 5 月 25 日の朝、トランプはその会談中止を決めたと報道された。突然、それも短期間に手のひらを返し合う両首脳である。それが繰り返され「禍」側の極に振り子が振り切れ、カタストロフィに至るのかどうかは予断を許さない。米国の陰に隠れ影が薄くなり、置いていかれかけている感のある日本にとっては、難しい局面となろう。そんな中、野党を含め現在の政治、行政、そしてマスコミが、真に重要な事象をどこかに置き忘れているように思えてならないのは、私だけではないと信じたい。

そういえば、先日 5 月 16 日の日経コラム「春秋」に‘似ているな日銀もんじゅ稀勢里’という川柳が引用されていたが、どうしても先送りの日本を重ねてしまう。